魔法少女リリカルなのは。全長30?のロボを操る少年

ロボコマンド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは。全長３０？のロボを操る少年

【Ｎコード】
Ｎ４５９１Ｙ

【作者名】
ロボコマンド

【あらすじ】
この物語は、あるひとりの少年が、２人の魔法少女に出逢う物語。全長３０？のロボを操り、その少年はその２人の運命を変えようとする。
果たしてその行動の果てにあるものは…

この小説は作者の処女作です。初めて書くので読みにくいし、駄文かもしれませんがよろしくお願いします！

第1話（前書き）

あらすじと余り変わりませんし、文字も違っているかもしれませんが
どうぞ！

第1話

その物語は、1人の少年の介入で徐々に変わっていく…

ある二人の少女は「願いが叶うと言われる石」をめぐり、何度もぶつかり合う…

だが、その二人の少女の心に「あの石を使って自分の願いを叶えたい」と言う邪な心は無い…

ならば、何故その二人の少女はその石を集めるのか？

1人の少女は言う

「私は最初、助けてって言われて、その石を集めるお手伝いをしてた…でも、今は違う…私は貴女と「友達」になりたいんだ…」

1人の悲しい眼をした少女は言う

「私は、もう一度だけでいいから、母さんに「愛されたい」んだ…母さんが集めて欲しいって言ったから…だから、その石は譲れない！」

二人の想いは交わらない…

だが、運命は変わる…

これは、自称一般人の少年「弥生和正」が、二人の少女に出会い

その二人の少女の運命を変える物語…

第1話（後書き）

誤字、脱字等の指摘をしてくださると幸いです。
次話も何とか頑張って書きます！

第2話（前書き）

うおお！
第1話の投稿が変になってるー！
やっぱり初めての投稿じゃ何かズレるのかな？

えっと、第2話投稿です
またおかしな箇所があるし駄文かも…

でも、見てくださると幸いです。

（第1話を書き直しました。）

第2話

［……と、言う訳。皆わかったかな？］

［［［はーい！］］］

［は～い…］

この場所は、海鳴市と言う市。
そして今、元気良く返事をしたのは子供達である。
そうここは、海鳴市にある学校の一つ「私立聖祥大附属小学校」である。

そして…
キンコンカンコン♪

と鐘がなり、その鐘の音を聞いた先生は

［うん、丁度良く鳴ったわね。それじゃあ皆！気を付けて家に帰ってねー］

はーい、と、また生徒達は先生にそう答え。
先生は、その生徒達の声を聞いた後、教室から出ていき、生徒達はそれを見送った後、家に帰る用意を個人個人でしだす。

だが、この教室で唯一帰りの用意をせづ、机に、今日出された宿題のプリントを広げ、まるで答えがわかっている様な早さで、そのプリントに鉛筆を走らせる1人の少年が居た。

その少年の名は
「弥生和正」
和正はスラスラと鉛筆を動かし続け、その結果。ものの数分で宿題は片付いた。
すると、和正が宿題のプリントを書き終えた瞬間。
バシン！！
と、机を叩く音が聞こえた。和正は、自分に無関係な出来事は無視するが、その机を叩く音がしたのは、和正の近く…というよりは、今、和正の真正面に居る人物が和正の机を叩いたのだ。
和正は、明らかに自分に起こっている出来事を、何もなかったかの様に無視し、書き終えたプリントをランドセルの中に入れて椅子から立ち上がり、そのまま帰ろうとしたが…
［ちょっと！待ちなさいよ！！］
和正の机を叩いた人物が、怒った声で和正に話しかけた。
和正はその声を聞いて、あと一歩で教室を出る足を止め、小さく溜め息を吐いた後、ゆっくり振り返った
［んん？どうした？えっと名前は確か……バーニングスだっけ？］
［違うわよ！私の名前は「アリサ・バニングス」！！いい加減覚えなさいよ！］

［あ～あ、そんな名前だったな。で？そのバニングスさんが俺に何の用？］

［アンタ、いっつも授業中に寝てるくせに、何で今日出された宿題をいつもあんなに早く解けるのよ。］

［はぁ…そんな事で俺を呼び止めたのか？案外お前も子供だな。］

［なっ！？それを言うならアンタも子供で［あ～あ～聞こえない、聞こえない～］あっ！待ちなさいよ！！］

和正は両耳を塞ぎ、そう言いながら教室を出ていき、アリサはまだ和正に何かを言いたいらしく、急いで教室を出て、廊下に出るが、その廊下の先に和正は既に居なかった……

和正サイド

俺は教室を出た後、すぐ全速力で走り、バニングスに見つかる前に階段を駆け降り、その勢いのまま走り続けて、学校の校門を抜け、その後もしばらく走り続け、俺はスタミナが切れる寸前で走るのを止めた。

［ハァ、ハァ、ハァ…ふう、ちょっと疲れたが面倒くさい事だったからな……はぁ、まあでも、流石に俺が「転生者」だなんて言えないわな～］

俺はそう呟きながら、右手で後頭部を軽く掻く。

そこのお前。今俺の事

重度の厨二病野郎だって思わなかったか？

残念ながら俺は本当の「転生者」だぜ。
何？転生者ならどうせチート能力あるんだろ？見せて見ろよ。だって？

まあ、見せてもいいが、今は使えない。俺が家に帰るまで待て…てっ、俺は誰に話してるんだ？
……まあ、いいか。
とっ、家に着いたな。

［ただいま～あーー！？！！］　俺は家のドアを開けて中に入るが、その時に俺の眼にある光景が飛び込み、俺はすぐさま靴を脱ぎ捨て、そう叫びながら俺は、ある人物から、俺の所有物を奪い去った。

［ああ！！お兄ちゃん！それ返してよ～］

［駄目だ！なに勝手に俺の部屋から取って遊んでんだ！］

［む～、別に良いじゃん！お兄ちゃん、それで全然遊ばないし、お人形さんが可哀想だよ！］

ムム、痛い所を…だが！

［これは、そう言う風に遊ぶ物じゃないんだよ！だからもう触るなよ。］

［うう～～！］

フッ、そんなに睨んでも、下からじゃ可愛いだけだぜ！我が妹よ！

さて…

［それじゃ俺は自室にでも行きますか。ああそれと、母さんに俺が帰ってきた事を伝えておいてくれよ「由加」］

そう俺は伝えた後、由加から取った人形？（ロボット）を右手に持ち、ランドセルを背負ったまま、自室へと向かった。
そして俺は、自室に入りつつドアのカギを閉め、背負っていたランドセルをベッドに放り投げてから、俺はドスン！と、あぐらをかいて座り、その後、右手で掴んでいた物を目の前に置き、眼を瞑り少しロボットに集中する。

そして、そのロボットへと集中を更に強めていくと、徐々に俺の全感覚が、そのロボットに移っていく感覚がしだす…

そして…

ウィィーン…

先ほどまで動く気配すらなかったロボットが、急に明確な動きをしだし、そのロボットは和正を見上げて…
［ふう…良し！「ダイブ」成功だ！］

ロボットから俺の声が聞こえた。
えっ？何が起こったか分からないって？
良し、いいぜ！教えてやる！
まず俺は転生者だ。
難しい話しはすっ飛ばすが、俺はこの世界に転生する時、神様にある能力をもらった。
その一つがこの「ダイブ」だ。

俺の元居た世界のゲームの能力で「カスタムロボ」って言うロボに精神を移させて戦う事が出来る能力なんだ。

その他にもまだ能力はあるが、それは追々でもいいか。

それと、俺がこうやってダイブしてるのは、まだ少し慣れてないから。

実はこの訓練、５年前からやっているのだが、まだ少し慣れてない。

まあ、昔に比べたら大分マシだが、まだダイブしたまま自分の体で喋る事が出来ないんだよな…

まあ、説明はこれで終わりだ！さて！！

［訓練開始だ！］

俺は言葉通りに訓練を開始した……

第2話（後書き）

和正は能力をまだ完全に扱えてはいません。
訓練はしてるんですけどね～

ゲームでは、ダイブをしてもすぐには動き回れないらしいので、自分なりにかなり難しいのかな？
と、思って難易度を上げてみました。

誤字、脱字等の指摘は、してくださるとありがたいです。

主人公とその他のキャラ設定（前書き）

え～と
まだそんなにキャラは出てはいませんが、
キャラ設定です。

主人公…身体的には一般人だな…

で！でも！ダイブすれば強いんですよ！
本当に！！

では、キャラ設定でそんなに文章は少ないですが
どうぞ。

主人公とその他のキャラ設定

魔法少女リリカルなのは
全長３０？のロボを操る少年
キャラ設定

弥生和正（やよい・かずま）
性別　男性

歳　九歳

髪の色　真っ黒

瞳の色　黒

身長　１３５？

顔の良さ　中の上（ちょっと格好いい。と言う感じ）

体重　２５？

性格
性格はシンプルで、自分が既に理解、わかっている事
自分に関係の無い事にはとことん無頓着で、反対に自分に関係する
事にはちゃんと対応するし、良く聞く。
面倒くさがりと辺りからは思われがちだが、結構な働き者で、勉強
以外の事には良く動く。
（教室の掃除等、家の手伝い等々…）

現時点で置かれている立場
弥生家の長男で、歳の離れた姉と、二歳違いの妹がいる。
実は転生者で、神様から数個程能力をもらっている。
私立聖祥大付属小学校に通う三年生で、実はなのは達と同じクラス。
学校での成績は男子三年生の中では一位（全てのテストの点は１００点。和正曰く覚えているから。だそうだ）

実の所、和正はリリカルなのはの世界を少ししか知らない。（神様から少々のあらすじは聞いてはいるが、誰が何をするのか？等の細かな情報は聞いていない）

神様から貰った能力

「ダイブ」
カスタムロボに自分の精神を移し、操る力
（本来ならば、ダイブしていても元の体で声を発し、受け答え出来るのだが、和正はまだそれが出来ない）

「パーツ復元」
自分のイメージしたカスタムロボのパーツを、復元し、扱う力
（和正の一番使い慣れた能力で、ダイブ中でも発動可能。ただし、ダイブ中とダイブをしていない状態では能力が変わり、ダイブ中にこの能力を使用すると、ガンパーツを和正が頭でイメージした瞬間にガンパーツがイメージしたパーツに変わり、ダイブしていない状態なら、イメージしたパーツが手の平に物体として現れる）

「ハーフダイブ」
目が付いている全ての人形（ロボット）の見た光景を視れる能力
（本来は、カスタムロボにダイブしたコマンダーの残留思念を読み取る能力なのだが、神様が少し能力を変えてくれた為、こうなった。

だが、和正曰く、あまり使い道が分からない。との事）

身体能力は小学生のまま…

と言うより、何も変わっていない。

弥生由加（やよい・ゆか）

性別　女性

歳　六歳

髪の毛　少し茶色がかった黒髪で、背中の辺りまで髪を伸ばしている

瞳の色　黒

顔の良さ　上の中（一言で表すなら、美少女。だ）

スリーサイズ

な～に、それ？

体重　１４？

身長　１２０？

性格

明るく、元気で活発な性格だが、読書も好きで、時折読んでいる本で読み方が分からない時は、姉か和正に聞きに行く。

（和正はその行為が少し可愛いと思うらしいが、和正はシスコンで

は断じてない）

置かれている立場

弥生家の末っ子
和正と同じく、私立聖祥大付属小学校に通う一年生で同じクラスの男子からは、アイドル的な存在として見られている。

不思議な行動

由加は時折、和正の部屋にあるカスタムロボを勝手に持ち出し遊んでいるが
その遊び方が少し変わっていて、その持ち出したカスタムロボで遊ばず、ただ目の前に置き、まるで誰かと話す様に喋るのだ。
更には、時折頷いたり、笑い出したりと、本当に人間と会話している様な事もする…

アリサ・バニングス

いつも授業中に寝ている和正が、何故テストや宿題を早く解けるのかが気になり、何度も話しかけて（怒鳴って？）いるが、その度に和正にはぐらかされ、逃げられている。

主人公とその他のキャラ設定（後書き）

主人公の設定が見にくいかもしれない…

と言うか、設定って考えるの難しい…

なんとかもう1話は書ければいいんだけど…

第3話

おっと、俺は和正。
とと！ちょっと今は話しかけないでく…うげ！！ジャベリン相変わらずきたねー！
しかもショットガンか！！くそ！
ガチャガチャガチャガチャガチャ（ガチャレバ＋ボタン連打音）

よし、復帰！
ついでに後退するのが遅いぜ！
俺のボタン連打スタンガンを食ら！
ブツ…（画面？が消えた音）
はい？　てっ、おいおい！！今から俺のスタンガン連打が始まるところだったのに何故に画面が消え…

ブン…（画面？が付いた音）
お？画面がつい……
え～～～！！？
な！なんで相手がジャベリンからジェイムスンに変わって！うっ！
くっ、くるな～～！！

［うおわ！！……えっ…夢？］
俺は危機一髪の瞬間に飛び起きた。
だが、どうやら俺は、死んだ？ら夢から目覚めるオチ。で、眼を覚ましたらしい…でだ
［母さん、起こすのはいいけど、もっと普通に起こしてよ…］

どうやら、俺の夢が途中で変になったのは
俺の寝ているベッドの布団に何時の間にか潜り込み、頭を出して、

顔をニコニコさせながら
俺の体にその豊満な胸を押し付ける母さんのせいらしい。
すると、俺の言葉に、母さんは表情を崩さずに

［ん！やっと起きた。ちょっと唸されてたみたいだけど、大丈夫？］

［だ、大丈夫、大丈夫…］

［そ！良かった。それじゃあ早く学校の用意をして、リビングに来てね♪朝食を用意して待ってるから♪］
最後まで表情を崩さずにそう母さんは言った後
俺の体からその豊満な胸を離し、布団から出て
更にベッドからも出て立ち上がり、そのまま俺の部屋から出て行った。

［はぁ…まあ、言われたからには行かないとな。学校に……チャチャッと用意を済ますか。］

俺はそう1人で呟いた後、学校の制服に着替えだす。
実を言うと、母さんのあの行動は、ある日を境に始まった事だ…
あれは、俺が一年生の時、一度だけ学校に行った振りをして学校に行かず、
それを、待てども暮らせど学校に来なかった俺を心配してか、
俺の担任の先生が電話で母さんに伝えた事が原因だ。

その後、それを知らずに帰った俺を待っていたのは、一発の顔面ビンタと、
思い出すだけでも体が震えだす地獄の制裁だった。

まあ、その後に母さんが

その制裁を受けて体がボロボロの俺を抱きしめて

（お願いだから、心配させるような事はしないで…本当に……）

と、泣きながら俺に言ってきた事を、俺は昨日の様に覚えている。
まあ、その後からは、俺も学校にはしっかり行っている。
（あの地獄をもう一度味わいたくは無いし…）

と、そうこうしている内に俺は着替えを済まし
ランドセルを右手で持った後、部屋を出ようとしたが　、ふと、一つだけ忘れていた事を思い出し
俺は自分の部屋の、ある箇所を見る。

俺の眼に見える物は、
自分の部屋にある横長の本棚と、その本棚の上に、ポツン…と存在する、一つのロボだった…

そして、その本棚の上に存在するロボの名は
「レイ」
レイシリーズと呼ばれる中の一つで、そのシリーズの初代機…
俺が「カスタムロボ」と言うゲームの中で、一番好きなロボだ。

（あっ、そう言えばもう一体居たな…）

俺は再び何かを思いだし、今度は自分が先ほどまで寝ていたベッドに目を向ける。

そして、そのベッドに近づいた後、その場で身をかがめ、俺はそのベッドの下に左手を滑り込まし、手探りで何かを探す……すると

コツン…

左手に何かが当たる感覚を唐突に感じ、俺は、その左手に当たった物をしっかり握った後、
ベッドの下に滑り込ました自分の左手を、そのベッドからゆっくりと抜く…
そして、俺の左手に握った物は姿を現した。

俺の左手にある物は、
レイと同じく「カスタムロボ」と言うゲーム…の、続編「カスタムロボV2」に、新型のロボとして登場した。

ストライクパニッシャー
名を「ランス」と言うロボが俺の左手に握られていた。

なぜ、このロボがベッドの下から出てきたのか？
その理由は、俺が隠していたからだ。
えっ？どうして隠していたのかって？
それは、由加にこのロボを触らせない為である。
（あまり意味を成していないが…）

由加は、何故かは分からないが、度々……いや、ほぼ毎日勝手に俺の部屋に入り、隠しているのにも関わらずこのロボ、ランスを見つけては手に取り、遊んでいる。
（何で隠している場所が分かるのかは不明だが…）

俺は一度だけ、由加が俺の部屋からランスを持ち出す瞬間を見た事があり、
その時に俺は、由加の後をこっそりつけて、由加がランスを使ってどう遊んでいるのかを見たが……

不思議、としか言い様のない行動をしていた。
まあ、その後すぐに由加から奪い返したのだが…
おっと！つい回想に入ってしまった。

［早く用を済まさないとな。］

俺は部屋でそうポツリと呟いた後、本来の用事に戻る為、動き出す。
まずは、左手にランスを持ったままベッドから離れ、　本棚まで移動した後、
左手のランスを本棚の上に置き、今度は、いま空いた左手でレイを掴み、
その掴んだレイを、自分の目線の高さに合わせ、レイの目と、俺の目を見合わせる。

すると…
「アイコンタクトレジスターを再確認。キューブ形態えと移行します…」

そう機械的な音声が流れた後、俺の左手にあるレイは、その姿形を変え始め、
あっ、と言う間にレイの姿は、俺の左手に収まる程小さいサイコロの姿へと変形した。

もちろん、このレイが変形したサイコロの六面には、頭・足・背中・腹・左手・右手・の絵がその六面の一面一面に一つづつ描かれている。
（ぶっちゃけ、ゲームと何ら変わりが無い）

そして俺は、そのサイコロえと変形したレイをランドセルの中に入れ、
今度こそ、俺は自分の部屋　を出た……

和正が自分の部屋から出て、リビングに行くまで、そう時間はかからなかった。

［おはよう～…］

［はい、おはよう♪朝ごはんは用意してあるよ♪］

と、台所から和正にそう言葉を発するのは、
和正の母親
「弥生雪菜」
この人の外見を一言で表すなら
「超絶美女」
である。

そして、その言葉を聞いた和正は、自分の朝食が用意されてある長方形のテーブルに近付き、
この家族の人数分の椅子の一つに近づいて、和正は自分の身長よりも高い椅子を引き、
背が足りないので、少しよじ登る様にその椅子に座った。
すると、椅子に座った和正の左側から、透き通った声で嫌みな事を言ってくる者が居た。

［ふぅ…［早く背が延びないかな～、って考えてる？］そんな訳無

いだろ、勇気」

ガツン！

と、和正が、そう声を発した者に言った直後に、和正の頭に一撃拳骨を食らわすこの人物は

和正と由加の歳の離れた姉で高校2年生、弥生家の長女。

「弥生勇気」

この人物の外見を一言で表すなら

「可憐な女性」

である。

（性格は凶暴だが…）

「痛！何すんだこの外見詐欺！！」

「詐欺って！？和正！もう一度それを言ってみなさい！拳骨一発じゃ済まさないわよ！！」

「ああ！何度でも言ってやるよ！！この外見詐「ガツン！ガツン！」イッ！！（痛た！）」

「……早く朝食を食って学校に行け…」

急にケンカをしだした二人の頭に、唐突に拳骨が落とされた。

ケンカをしていた二人は、その拳骨でケンカを止め、拳骨が落とされた頭を手で擦りつつ

声の主を涙目で見ると、そこに居たのは

この弥生家の大黒柱

「弥生忠成」
この人物の外見を一言で表すなら
「存在感があり過ぎる男性」である。

［と、父さん。何で私にも拳骨落としたの～］

［…最初に和正に声をかけたのは勇気、お前だろ…］

［うう～、確かにそうだけど～］

忠成は、勇気のその言葉に　そう返した後、
和正と勇気の方に、向かい合う形で椅子に座った。

二人は、忠成に叱られた後、言われた通り食事に集中した。
そして、数十分後…

［［ごちそうさまでした］］

和正と勇気は、両手を合わせてそう言うと、台所に居た雪菜がテーブルの方に来て

［はい、お粗末様でした♪］
と、満面の笑みでそう言った。

と、ここで和正が、ある事を雪菜に聞く。

［ん？母さん。由加は何処に行ったんだ？さっきから姿を見てないんだけど？］

［由加ちゃんなら、結構早い時間帯に学校に行ったよ。しっかりさ

んだからね♪」
「あんたとは大違いね。」
「それを言うなら勇気もな…」
その和正の言葉を聞いた勇気は、一瞬、眉がピクッと動き、手を出そうとしたが、そこはグッと抑えた。
そして、聞きたい事を聞き終えた和正は、
「ふーん、分かった。それじゃあ朝食も食べたし、学校に行ってくるよ。」
そう言って和正は玄関へと走って行き、靴を履いて玄関のドアを開けた。
すると
「カズちゃん！車には気を付けてね～！」
雪菜が、和正に聞こえる様に少し大きな声でそう言うと、
「分かってるよー、そんじゃ、行ってきまーす！」
和正も、それに応える様に　少し大きな声で言い、
その後、玄関のドアを閉めた……
だが、和正はまだ知らない。

今日と言うこの日が、和正の運命の別れ道だとは…

第3話（後書き）

かなり間があいたな…

しかも、キャラ紹介みたいに…

小説を書くのは難しいけど、なんとか頑張りたい！

（相変わらず駄文だが…）

第４話（前書き）

投稿が遅い割に駄文すぎる……しかも短い…

ダメダメだな…自分は……

それでも読んでくださる方には感謝としか言えません…

それでは、どうぞ…。

第４話

時刻は７時４０分。

和正が家を出て、すでに１０分が経過。

ところで、その和正はと言うと…

［Ｚ～Ｚ～Ｚ～］

自分のクラスの”とある机”で、突っ伏して眠っていた。

実は、和正の家と、和正の通う学校、私立聖祥大付属小学校は案外近くで、

歩けば１０分位

走れば５分位で学校に着ける為

和正がすでに教室に居るのは、何ら不思議ではなかったりする。

そして、時間は過ぎていき……

なのはサイド

私の名前は「高町なのは」

と言います。

実は、つい最近までは極々一般的な小学三年生だったのですが、

ある日を境に［魔法少女］になっちゃいました。

フェレット…えと、ユーノ君のお願いで、
願いが叶う石。名前は［ジュエルシード］と言うのですが、それを
集めるお手伝いをしています。

あ！でもでも！しっかり学校には行ってますし、
それに、今だってしっかりり、学校に行くためのバスに乗ってます！

「なのはちゃん。昨日の宿題はやってきたよね？」

「うん！もちろん♪」

「まっ！当たり前よね。あの宿題簡単だったし」

「あはははは…」

相変わらずアリサちゃんは口厳しいな～

あっ、そう言えば紹介するのが遅れちゃいました！
先ほど、私に最初に喋りかけてくれて、私が座って居るバスの椅子
の、左側の椅子に座って居るのは、私の友達であり、親友の
［月村すずか］ちゃんです。
それと、宿題が簡単だったし。と、いつもの口調で言い、
私の右側の椅子に座って居るのは、すずかちゃんと同じく友達で親
友の
［アリサ・バニングス］ちゃんです。

すずかちゃんとアリサちゃんの二人と知り合ったのは、私達三人が
まだ小学一年生の時です。

その時の事は話すと長くなるので、今は置いといて…今は仲良く談

笑中です♪

「そう言えば［弥生君］はもう学校に着てるのかな？」
「弥生君？あ～、アリサちゃんと毎回言い争いしてる男の子？うーん、”いつもどうりなら”もう着いてると思うよ？」

すずかちゃんが、急に私達のクラスに居る男の子。
［弥生和正］君の話しをし出した所で、話しの話題はそれになった。

「そう言えば、あいつが遅刻してきた事って無いわね…」
「うん、確かに……あれ？よく考えれば弥生君って、遅刻どころか”誰よりも早く学校に来てるよね？”」

「うーん、確かにそうよね…もしかして、学校に寝泊まりしてるとか？」

（アリサちゃん…それは無いと思うな…）
心の中で私がそう思っていると、
すずかちゃんから思わぬ言葉が出た。

「弥生君が遅刻しないのは、弥生君の家と、学校との距離があまり離れてないからだよ」

「「な～んだ、そんな事だったん……え～～～～～！！？」」

私とアリサちゃんは、すずかちゃんの、その発言に最初はつられてしまいましたが、
その後、叫ぶ様に大きな声を上げて驚いてしまいました。
バスの中での出来事なのですが、聞いた内容が衝撃的すぎて、思わ

ず大きな声を上げてしまいました…
（反省…）
でも、私達が驚く程の発言なのは確かなのです！
「す、すずか！どうしてそんな事知ってるの！？」
「え～と、本人に聞いた。じゃ、駄目かな？」
「えっ！ちょっと待って、すずかちゃん！本人に聞いたって本当？」
「うん、本当だよ。私も、実はその事は気になってて、休み時間に”左隣の席の弥生君”に、珍しく起きてたからダメ元でその時に聞いてみたんだけど、教えてもらえたよ。」
「……あいつって、授業中は寝てばっかだし、珍しく授業中起きてても不真面目だけど、ああ見えて以外と”聞かれた事にはしっかり返す”性格なのかしら…」
「……人って見かけによらないね…」
私とアリサちゃんが、驚きすぎたせいで、最後の方は少し脱力しながらそう言うと
そのすぐ後に、私達が乗るバスは、丁度良く目的地に到着しました
……

第４話（後書き）

実は、なのはとフェイトは既に一度出逢っています。（原作で言うと、この小説の話は、第４話と第５話の中間辺りです。）

第5話（前書き）

どうも、ロボコマンドです。

今回は少し早い更新です。
相変わらず駄文だし、今回の話はグダグダっぽい気もしますが、
読んで下さると幸いです。

第5話

なのはとすずかとアリサ、そして、その他の私立聖祥大附属小学校に通う子供達は、
乗っていたバスが、学校の校門前に着いた事で、ぞろぞろとバスから出てきた。
そして、場所は学校内へと移り……

［私立聖祥大附属小学校・廊下］

廊下には既に、数十人程の生徒達が自分の教室に向かうため、歩みを進めていた。
その中には当然、なのはやすずかやアリサも含まれる訳で……。
（ついでに時刻は８時）

それで、そのなのは達はと言うと……
自分達の教室へと、会話を交わしながら足を運んでいた。
先ほどバスの中で話題になった話しは何処えやら、３人は既に違う話題で会話を交わしていた。
女性同士の会話はコロコロと話題が変わるが、
それは小学生の彼女達でも例外ではないようだ。
そして、会話を交わしながら足を進めていたなのは達は、
数分程度で自分達の教室前に着いた。

そして、3人の中で先頭に居たアリサは、
廊下側にある教室に入る為の、前後に2つ存在するスライド式のドアの内、
目の前の、前の方のドアを、ガラガラ。と、音を出して開けた。
そして、必然的にその教室の中の光景を先に見たアリサの目に映ったものは……
何時もと変わらぬ教室の光景……ではなかった。

［私立聖祥大附属小学校・教室内］

アリサは自分の目に映った光景を二秒ほど硬直して見た後、
脱兎の如く”その光景に居た1人の人物”に近づき、パシン！！と、
その者の頭を容赦ない一撃で叩き、快音を鳴らした。

その快音と、目の前にいたアリサが脱兎の如く駆け出した事に若干驚きつつ、
アリサのすぐ後ろに居たなのはとすずかは、一歩踏み出して教室へと入った。

そして……

「あ……」

なのはと同時に教室に入ったすずかは、教室内に入り、その光景を見た瞬間、思わず声が出てしまった。
なのはは、声は出してはいないが、表情が苦笑いになっていた。

すずかが思わず声を漏らしたその光景とは……

和正が”すずかの席”で、突っ伏して寝ている光景だった……

アリサに力の限り頭を叩かれた和正は、
すずかとなのはが教室に入ったところで…

「んん……ふあぁぁ……ん？もう授業全部終わったのか？」

和正は欠伸しつつそう言い、先ほどアリサに叩かれたにも関わらず、
叩かれたヵ所を痛がる素振りさえ見せずに起床した。

だが、その言葉を和正の真ん前で仁王立ちして聞いたアリサは、

ドガ！！

と、今度は自分の手ではなく、いつの間にか背に背負っていたランドセルを手に持ち、
それを和正の頭にぶつけた。

「痛っ……て、何するんだよバニングス…俺はまだ何もしてな「もうやってるでしょ！この変態！！」へ、変態！！…何で”自分の席で寝てただけなのに”そんな事言われないと……」

和正は乱暴に叩き起こされた挙げ句、［変態］と呼ばれた事で、ガックリと項垂れるが
そんな事はお構い無しにアリサが怒り散らす

「あんたね！私にちょっかい出すだけじゃなくて、すずかにも嫌がらせするの！」

「月村に嫌がらせ？俺がいつそんな事したんだ？」

「いつって…い・ま・やってるじゃない！！」

アリサは頭に血が登っているせいか、ギャー！ギャー！と、要件を言わず和正に怒鳴り散らしているが、
和正は、何故にバニングスが俺に怒っているんだ？と、自分が発端の筈なのに訳が判っていない。

だが、次に聞こえてきた不意の言葉に、
和正は要件を得て……そして恐怖した……

「弥生君。そこは私の席だよ……」

と、アリサの騒ぎ声に混じって聞こえた、一際静かなその声に、
和正は一瞬、体をビクリ！とさせた後、
ゆっくりとその声の主に頭を向けた。

そして、和正は見た……

何時もと変わらぬ笑みを浮かべた、［月村すずか］と言う少女を……

「つ、月村…こ、これには深い訳があって…」

（にこ〜〜）

「じ、実は俺も事態が飲み込めてなく……」

（にこ～～～～）

和正はすずかのその言葉を聞き、少し焦りつつも二回ほど言葉を発して弁論するが、全て［物言わぬ笑顔］で対応され……

「……すみませんでした！！すぐ！今すぐお退きします！！」

……和正の中で何かが折れた。

和正はその言葉を発したと同時にすずかの机の椅子から即刻立ち上がり、すずかの席の左側に棒の様に真っ直ぐ立った。

すると、笑みは崩さず、すずかは和正が自分の席の椅子から退いた後、

何事も無かったかの様に自分の椅子に座った。

そして、すずかは椅子に座った状態で左側に居る和正に笑みを向けて…

「弥生君…今度からは”アリサちゃん・なのはちゃん・この教室の子達の席の椅子に座らないでね”……もちろん、私の席の椅子にもね…」

それは、和正へ遠回しに”自分は自分の席に座ってね…”と伝えるものだった。

和正は、すずかのその言葉を聞き終わった瞬間、何故か背中に、ゾクリ。と寒気が走り…

「イ…ＹＥＳ！！サー！！」

何故か敬礼して、軍隊の掛け声をすずかに向けて言った後……

すずかの左隣の席に着席した……

だが、和正は思う…

（何なの…このカオス…）

と……

余談だが、後から蚊帳の外になっていたなのはとアリサはこう思ったらしい…

（（すずか（ちゃん）は怒らせない方が良い…））

と……

第5話（後書き）

和正の運命の別れ道は次回の話しです。

今回の話は…前の話の流れ的な物でした。

なのはが空気になったし、

すずかがキャラ崩壊？したかも…

次話は頑張らないと…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4591y/

魔法少女リリカルなのは。全長30?のロボを操る少年

2011年11月29日02時01分発行